

(これまでのあらすじ)

アンデリートは劇団の主演俳優だったが、主演女優との不倫を彼女の夫に疑われ、仕事と財産を失ってしまう。サロンド派（第二王子派閥の名称。筆頭貴族ガイザック家の領都の名称からつけられた）貴族のサルデン||リグレーに拾われたアンデリートはフェニールと名前を変え、サルデンの下で策動している。

ある日、サルデンからバイサ孤児院の人身売買帳簿を手に入れるよう命じられたフェニールは、とある賭博場を訪れる。そこでは、賭けに勝てば望みの物が手に入るが、負ければ命を奪われるルールがあった。賭博場の主人は、フェニールの前に二つの札を差し出す。「生」の文字が書かれた札を選べばフェニールの勝ち、しかし「死」の文字が書かれた札を選べば殺されてしまうという。

(登場人物)

・フェニール (三十)

本名はアンデリート。彼が出演する劇を一度でも見たことがある者は、彼が美しい容姿だけでなく、演技力で主演俳優の座を勝ち取ったことが分かるだろう。彼は今まで様々な役を演じてきたが、どの役も、結末は脚本に

書いてあった。しかし、フェニールという役の物語には、脚本がない。アンデリートは、結末を知らない物語でフェニールという役を演じている。

・カリリーナ (秘密)

フェニールと同じくサルデンに仕える仲間。八歳の時に母が亡くなり、バイサ孤児院に引き取られた。十四歳の時に孤児院によって娼館に売られて七年後、サルデンに身請けされた。元娼婦だが、普段は淑女らしい立ち居振る舞いをしている。娼館から出られた今も、身体を使って諜報活動を行っている。孤児院にいた頃、仲の良かった少女と、再会を約束するために交換したブレスレットを大事にしている。

・アウヴィス (三十二)

本名はヒュースレン。サロンド派筆頭貴族、ファセラ||ガイザックの嫡子。八年前、政敵のデリシア派（第一王子派閥。筆頭貴族キュリオス家の領都の名称からつけられた）貴族ギルベイン||キュリオスの策略によって、父親と揃って謀反の濡れ衣を着せられた。父親は刑死、自身も下層階級に落とされ、判決後人身売買所に送られたが、そこでサルデンに拾われた。今はフェニールたちと共にサルデンの下で暗躍している。

・サルデンⅡリグレー（四十二）

サロンド派貴族。十代の頃に父が亡くなり、若くして当主となった。自身より爵位が上の貴族の顔色をうかがうような父親の姿を見てきたせいも、常に野心を抱いている。

・ベアトリッツⅡニルスト（五十八）

サロンド派貴族で、第二王子の叔父。ヒューズレン（アウヴィス）の父親とは親友同士で、彼の一人息子の安否を気にしている。非常に威厳に満ち溢れている。

アンデリートは黙ったまま、札を食い入るように見つけた。どちらも大きさも、柄も全く同じだ。アンデリートが生き残る確率は二分の一。

「さあ、どうする？」

賭博場の主人がニイと笑う。まるで、客の心を見透かすかのような笑みだ。客を嘲るかのような賭博場の主人の表情を見て、アンデリートはかえって落ち着いた。

何を恐れる必要があるのだろうか。

——自分は、死ねないから生きているだけじゃないか。全てを失った五年前に、アンデリートは死んだも同然じゃないか。

冷静になったおかげか、札を選ぼうと手をかざしたと

ころで、ある可能性が浮かんできた。どちらにも「死」が書かれているのではないか。

「……」

札の大きさは、大人の親指ほどの大きさだ。頑張れば飲み込めるのではないか。

フェニールは右に置いてある札を掴むと、表を向けることなく口に放り込んだ。

「ちよっ……!?」

賭博場の主人は目を見開くと、慌ててフェニールの腕を掴んだ。

「この野郎！」

飲み込めるだろうか、と躊躇する時間は無かった。飲み込む、という選択肢しか無い。

無理矢理札を飲み込むと、剣を賭博場の主人に突き付けた。

「残っている札をめぐってみろ」

「あんだと……？」

賭博場の主人は青筋を立てながらフェニールを睨みつけている。相手が感情的になるほど、自分は落ち着かなくてはならない。フェニールは努めて冷静に告げる。

「ルールは私が『生』のカードを選べば勝ちとしか聞いていない。片方のカードを飲み込んではいけないとは言っていないから」

賭博場の主人は忌々し気に客を睨みつけながらカードをめくった。カードには「生」という文字が書かれていた。

「さあ、約束の物を――」

言いかけたところで、フェニールは咄嗟に、背後から迫ってきていた剣を避けた。処刑人の剣が椅子を切り裂く。

「待て」

賭博場の主人は処刑人を制した。

「この賭博場で血を流していいのは、敗者だけだ。あー、椅子が壊れちまったじゃねえか」

賭博場の主人は悪態をつきながら背を向けると何かを探し始めた。

ややあつて賭博場の主人は冊子を渡してきた。帳簿のようだ。

「ほら、これが望みの品だ」

フェニールは渡された帳簿をパラパラとめくった。

日付と人名、そして金額が書かれている。本物かどうか判断しようもないが、ひとまず目的のものは手に入れた。

「どうも」

フェニールは足早に賭博場を後にした。

不機嫌さを隠さない主人に、処刑人は尋ねた。

「良いのですか？」

「何がだ」

「先ほどの客です。生かしておいて良かったのですか？」
賭博場の主人は乾いた笑い声をあげた。

「俺が言ったのは、あくまでこの賭博場での話だぜ？
外で殺るなら問題ねえ」

賭博場の主人は小間使いに命じた。

「すぐにレーガン司祭にバイサ孤児院の帳簿が奪われたと報告しろ」

フェニールがニルスと公領都、ジェノヴァに着いたのは、二日後のことだった。

「フェニール」

声が出た方を見ると、髪を一つ縛りにした整った顔立ちの男がいた。

「アウヴェイス」

ジェノヴァで合流することを提案したのは、アウヴェイスだった。

アウヴェイスは唇に笑みを浮かべた。

「目当てのものは手に入れたかい？」

フェニールは辺りを見渡し、帳簿を取り出した。

「ああ」

「さすがな、無事で帰れた上に帳簿も手に入れるとは」
アウヴェイスは帳簿を受け取ると、鞆の中にしまった。

「さて、あとは私に任せておけ。ちゃんとサルデン様に渡しておく。——そして」

アウヴィスは、ずい、とフェニールに顔を近づけた。思わず嫌な過去を思い出し、フェニールは顔を強張らせながら後退りする。

アウヴィスは、フェニールの様子を咎める様子もなく続けた。

「私たちを狙う輩の存在に気づいているか？」

「……ああ。少し前からつけられていた」

「気づいているなら話が早い」

アウヴィスは振り向きざまに剣を払った。襲い掛かってきていた賊が倒れる。

フェニールもアウヴィスと背中合わせになり、剣を抜いた。

相手は三人。人数を把握すると同時に、敵が襲い掛かってくる。

フェニールは剣で賊の攻撃を受け止めると、相手の胴体を蹴り飛ばした。体勢を崩している隙に、胸のあたり

に剣を突き刺す。
直後、左隣から、次の賊の剣が迫ってきた。避けようと、思い切り身体を右にずらしたところで、アウヴィスが賊の脇腹を切り裂いた。——これで終わりだ。

「うっ……」

賊が舌を噛み千切ろうとしていることに気づくと、ア

ウヴィスは賊の髪を掴んで、顔を上げさせた。

「自殺は止めてくれよ？ 指示を出した奴の名前を聞かないとな」

フェニールは手早く敵に猿轡をした。

アウヴィスは楽しそうな顔をしている。

「こいつのことは私に任せてくれ。君はサルデン様のもとに戻りたまえ」

「何故だ？ 私も手伝うが」

アウヴィスは振り返った。

「尋問なら私に任せてくれ。君だって、人が痛めつけられているところは極力見たくないだろう？」

アウヴィスの言葉には有無を言わせぬ雰囲気だめられていた。

これ以上深く首を突っ込むべきではないだろう。フェニールは頷くと、その場を後にした。

アウヴィスは仲間が立ち去るのを見届けると、敵に向き直った。

「お前が正直に話せば、手荒なことはしないが？」

アウヴィスは乱暴に猿轡を外した。

「……」

賊が口を割る気配が無いと分かるや、アウヴィスは賊のふくらはぎを切り裂いた。

賊の呻き声があがる。

「さあ、まだ話さないか？」

「と、賭博場の主人だ……」

賊の悲鳴が響く。

「本当か？」

アウヴェイスはグローブを取ると、火傷で爛れた痕が残る手のひらをかざした。

「私の名前はヒュースレンⅡガイザック。八年前、謀反を企てた罪で処罰された貴族を知っているだろう？——私がされたものと同じ方法で痛めつけても良いんだぞ？」

「ほ、本当だ……」

直後、賊の喉が掻き切られていた。ヒュースレンは剣の血を拭うと、賊の亡骸を見下ろした。

——人を殺める度、感情を殺してきた。

オルホート歴一六七二年穀雨の月二十八日のことを、ヒュースレンは一生忘れることがないだろう。

「ガイザック家の財産の没収を命じる。並びにファセラⅡガイザックは絞首刑に処す。ヒュースレンⅡガイザックは下層階級へ落とした後、一刻の晒し刑に処す」

その日は、父の死刑判決と自分の下層階級へ落とす判決が出された日だ。父の絞首死体は晒された後、焼き払われた。ヒュースレンも拷問の傷が癒えぬまま晒された。

母は、夫と息子に出された判決に絶望し、自ら命を絶った。

八年前のあの日から、ヒュースレンの望みは、自分と

父の汚名を雪ぐことと、仇に復讐することだ。そのためには、いくらでも手を汚してやる。

ヒュースレンは賊の死体を片付けることなく、歩き出した。ここに放っておけば、野犬が処理してくれるだろう。

歩き出してすぐに、背後から声がした。

「ヒュースレン」

ヒュースレンは思わず足を止めてしまった。

まさか。人に見られていたという驚きよりも、本名で呼ばれた衝撃の方が大きかった。

振り返って声の主を認め、ヒュースレンは息を呑んだ。

……父の友人のベアトリッツⅡニルストだ。

「ヒュースレン！」

「人違いです」

ヒュースレンは目を伏せながら言った。昔「アウヴェイス」になる前は、髪が短かった。髪を伸ばせば、知り合いと遭遇しても、すぐに気づかれることはないと思っていたのに。何故、ベアトリッツのような身分の人物が、こんな路地裏にいるのだ。

ヒュースレンは父の友人に背を向けると、走り出した。背後でベアトリッツが何か叫んでいるが、気に留めてはいけない。ヒュースレンは振り返ることも無く、街中に溶け込んでいった。

アウヴィスと別れた後、つけられているとフェニールが気づいたのは、市場を歩いてしばらくしてからだった。迂闊だった。まだ賊がいたとは。どうする。このまま人目がある場所に留まるべきか、隙を見て路地裏に逃げ出すか。

逡巡した後、フェニールはわざと人目の少ない場所に出た。

大丈夫。演技には自信がある。

「――つけられていることには気づいていたぞ」

敵がたじろぐ気配がした。

フェニールは微笑を浮かべながら、振り向いた。笑みを浮かべていることが不気味だったのか、賊たちは後退りした。

「一体お前たちは何者だ？」

賊たちは答えない。

「参ったな。私に恨みがある者は大勢いるからな。政敵に異母兄弟に、領主を恨む民に」

フェニールの言葉に、賊は顔を見合わせる。相手の思惑が想像できて、フェニールは胸中で笑った。

一体こいつは何を言っているんだ？ これではまるで、領主の血縁者のようだ――。

「察しがついたようだな」

フェニールは、自信に満ち溢れた笑みを浮かべた。

「私はオルフェンスニルス。ベアトリツツニルス

トの嫡子だ」

賊たちは目に見えて狼狽した。

フェニールは内心ほくそ笑んだ。このまま押せば、上手くかわせるかもしれない。

「左様。この者は私の息子だ」

突如背後から声がして、フェニールは動きを止めた。振り返ると、立派な服に身を包んだ、男性が立っていた。

頭の半分ほど白銀の髪が混じっている。六十近くぐらいだろうか。

よく見ると、胸のあたりに大鷲と剣の紋章が刺繍されている。ニルスタ家の紋章だ。

「――父上」

本物の、ベアトリツツニルスだ。フェニールが動揺したのは一瞬だった。

ベアトリツツは視線だけで、相手を威圧するほど厳しい表情をしている。

「お前たちは何者だ？」

賊は素早く踵を返すと、走り出した。

「あ、待て！」

フェニールが追いかけてようとした時、賊の前に長身の男が現れた。男は鮮やかに賊の身体を薙いだ。

ベアトリツツも剣を抜くと、賊の方へ走っていく。フェニールも佇んでいるだけにはいかない。すぐに剣を抜いたが、直後、賊は全て地に倒れていた。

年齢を一切感じさせない、驚くほど無駄のない剣捌きだった。

長身の男は、手早く賊の一人を拘束している。

振り向いたベアトリッツと目が合った。

危機が去ったにもかかわらず、フェニールの背筋に冷たい汗が伝った。今の状況は、賊につけられている時よりも悪化している。フェニールは片膝を地につけ、これ以上、下げられないほど深く頭を下げた。

「申し訳ございません！ 私のような下賤な者がご子息の名を語り……」

ベアトリッツは何も言わない。もしかしたら今すぐにも、剣が首に下ろされるかもしれない。はたまた、監獄送りになるかもしれない。——それは死ぬよりも嫌だ。あそこに二度と戻りたくない。恐怖のあまり、心臓が縮こまる気がする。

恐怖に怯えながらベアトリッツの反応を待っていると、頭部に強い衝撃が襲ってきて、フェニールは意識を手放した。

目が覚めすと、見知らぬ部屋の中だった。辺りを見渡そうと起き上がろうとして、後ろ手に縛られていることに気づいた。

「目が覚めたようだな」
ベアトリッツだ。

「縄を解いてやれ」

「はい」

縄を解いたのは、賊を倒した男だった。三十代後半くらいだろうか。仕立ての良い服を着ているところを見ると、相応な身分の者のようだ。

フェニールは片膝をついて、姿勢を正した。

「重ねて謝罪申し上げます。——申し訳ありませんでした」

ベアトリッツは、ため息をついた。

「本来ならば死罪に値する行為だが、私の息子を名乗ったのは賊相手だけで、状況を考えれば今回ばかりは目をつむろう」

ベアトリッツは身を乗り出した。

「しかし、条件がある」

「条件、ですか……？」

フェニールを見下ろす男の目は、冷たい。

「ニルスト家は武勇に秀でた一族だ。当主のベアトリッツ公は、視線と佇まいだけで相手を威圧できるほど、威厳のある方だ」

いつだったか、アウヴィスがそう話していた。

フェニールは役者だった頃、ベアトリッツの娘と会ったことがある。今、リリアナは母親似だったことを知った。

「お前は……今は役者をしていないようだな」

フェニールは目を伏せた。

「はい」

肯定の言葉を口にすると、胸が沈んだ。

かつて、アンデリートは自分が所属していた劇団の主演女優に想いを寄せた。マリィダは夫いる身だったが、胸の底に沸き上がる想いを否定することはできなかった。二人で食事に行ったり、カーニバルを見に行ったりはあったが、それ以上のことはしていない。口づけもしたことがない。

言い訳でしかないことは分かっているが、不貞行為はしていない。

マリィダと共に外出に行ったり、マリィダの夫のジョナディオにばれ、アンデリートは劇団での居場所を失った。

主演俳優という座や、今まで積み上げてきた俳優としての人生さえも、失った。ジョナディオは陰湿に、アンデリートに報復した。

自分の妻が他の男と楽し気に食事をしていることを知った後、ジョナディオは不倫をした男女の物語を作った。

自分に不倫した男の役が与えられた時のことを、アンデリートは鮮明に思い出せる。怒りや恥ずかしさのあまり、その場に立っていることがやっとなった。

血の気が引いた顔で、呆然と立ちすくむアンデリートを見て、ジョナディオは嘯るように嘲笑った。人は、こ

こまで残酷な笑みを浮かべることを、アンデリートはその時知った。

「どうした？ 名優殿」

他の劇団員も面白そうに、笑みを隠しきれない顔を見せていた。

故郷に帰っても良かったかもしれない。しかし、父の跡を継がずに家を出た手前、夫いる女性に想いを寄せたがゆえに役者を続けられなくなったという理由で、実家に帰る訳にはいかなかった。

アンデリートは、すぐさま劇団を辞めた。貯金はあったため、他の街へ行こうとしたのだ。

しかし、ジョナディオは徹底的にアンデリートを痛めつけたかったようだ。ジョナディオは民事裁判を起こした。

「では、今は何をしているのだ？ それに、今日お前と話していた長髪の男は誰だ？」

ベアトリッツの声で、アンデリートは我に返った。アウヴィスのことだろう。アンデリートは胸中で舌打ちをした。自分たちのやり取りを賊以外にも見られていたとは。

ベアトリッツはサルデンと同じくサロンド派（第二王子派）のはずだが、自分たちの味方が分からない。

アンデリートが何も言わないつもりだと悟ると、ベアトリッツは質問を変えた。

「そなた、ヒュースレンという男のことを知っているか？」

「ヒュースレン……」

八年前、謀反を起こした罪で処罰された貴族だ。

「名前は聞いたことあります」

(やはり……)

ベアトリッツの質問で、確信を得られた。

アウヴェイスの本名はヒュースレンだ。アウヴェイスの言動は、付け焼き刃とは思えないほど洗練されている。わざと乱暴な言い方をしている時もあるが、それでも育ちの良さは隠しきれていない。ガイザック父子の話を聞いた時から、アウヴェイスがヒュースレンではないかと推測していた。

「名前を聞いたことがある、とはどういうことだ？ あ

の長髪の男の名前は何なのだ？」

「アウヴェイスと名乗っています。……私たちは、互いの

素性も本名も知りません」

ベアトリッツは険しい表情のまま黙っている。

「正直に答えろ。そなたは、誰に仕えている？」

背後から声があった。

三十代後半に見える男は話を続ける。

「言わないなら、少々乱暴な手段に出なければならぬが」

剣を奪われていることに、少し前から気づいていた。

下手に抵抗しようとすれば、痛い目を見るのは明らかだ。主人と同じサロンド派なら、話してしまっても大丈夫だろうか。

「私たちはサルデン||リグレー様に仕えています」

アンデリートは正直に答えた。

「サルデンだと……？」

ベアトリッツは、眉をひそめた。

「そなたは、サルデンの下で何をしているのだ？」

「主人の政敵の勢力を削ぎ、邪魔者を消すのがそなたらの仕事か？」

フェニールが答えるより先に、三十代後半の男が口を挟んだ。

どう答えるべきかフェニールが思いあぐねていると、

男は話を続けた。

「そうだな。最近のことで言うならば……ティモール(デリシア派貴族、タートス伯のお抱え商人)が亡くなったのは、そなたらの仕業か？」

「……そうなのか？」

アンデリートは咄嗟に答えられなかった。

「どうして、あの者の死が仕組まれたものだと思ったのだ？」

「いえ、何かきな臭さを感じて調べていたのです。ティ

モールが死んだ直後に下男まで死ぬとは、あまりにも出来すぎている、と」

男は面白そうに口角を上げた。

「さすがだな、一切表情には出さないか」

「私たちの仕業だという証拠はあるのですか？」

「手短に調べただけだからな、証拠の類は見つけていない。否定したいなら否定すれば良い。何も、お前を罪に問おうとは思っていないのだから」

男は一礼した。

「私はヴィクトワールⅡドレイン。ベアトリッツ様の家令だ」

甘い顔立ちのせいだろうか、若者には出せぬような色気を持っている。理想的な年の重ね方をした、お手本のような男だ。

「お前の劇は私も見たぞ。見事な演技だった」

「ありがとうございます」

「お前ほどの役者が、何故サルデン様に仕えているんだ？」

アンデリートは、ベアトリッツとヴィクトワールの顔を交互に見た。

「お二人とも、主演俳優が退団した理由をご存じですか？」

「ああ」

ヴィクトワールも頷いた。

「噂で、不貞を働いたと」

「では、退団後どのような目に遭ったかご存じですか？」

二人は首を振った。

「仰つたとおり、私は五年前、主演女優と不貞行為を働いたとして、彼女の夫から訴えられました。私は、彼女と肉体関係を持ったことはありません。ですが、結果は原告の勝訴。私は法外な賠償金——五十万ピュリを払うよう命じられました」

金額を聞き、ベアトリッツとヴィクトワールは目を丸くした。都会の宿で一泊するのに、二十五ピュリ必要だと言われている。……平民ならば、生涯一銭も使わず働いたとしても、手に入れられない金額だ。

「そのような金額……」

アンデリートは頷いた。

「もちろん、私は浪費家ではありませんでしたが貯金をはたいても払えませんでした」

アンデリートは右手首に巻いてある包帯を外した。爛れて変色した皮膚が現れる。

「私は街の人々の嘲笑に晒されながらも他所へ行く金も、日々を生きていくための金も無く、盗みを働きました。そして、入れ墨を入れられた後牢獄へ送られました。その時、サルデン様がお越しになったのです。サルデン様の下で働くのであれば牢獄から出してくださると言われました。これは、サルデン様に拾われてから薬品で入れ墨を消した痕です」

アンデリートが口を閉じると、沈黙が下りた。ベアト

リッツはしばらく考え込んでいるように黙っていたが、やがてアンデリートの目を見据えた。

「そなたは誰だ？」

ベアトリッツはフェニールの本名を知っている。偽名を使う道か、本名を名乗る道を選ぶのか聞いているのだ。

「私は――」

元役者の男が悩んだのは、一瞬だけだった。

「アンデリートです」

どの役名でもない、自分自身の名前だ。人前でこの名前を告げるのは、一体いつぶりだろう。

「では、アンデリート。そなたは追ってきていた者に心当たりはあるか？」

「はい。私は過日に、バイサ孤児院の人身売買帳簿を手に入れました。それ以来、賊につけられています」

「人身売買帳簿？」

ベアトリッツは怪訝な表情を見せた。

「妙な話です。孤児院で後ろめたいことが行われている証拠が掴まれたとしても、ここまで躍起になるとは……」

ヴィクトワールはアンデリートを見据えた。

「ちなみに、サルデン様はどのような理由で、売買帳簿を欲しがっていたのだ？」

「存じません。訳を聞いても、教えてはもらえませんでした」

「ふむ……では、帳簿はどこで手に入れた？」

アンデリートは賭博場のことを話した。

「我が領地でそのような場所があったとは……」

ベアトリッツは、苦虫を噛み潰したような表情で考え込んでいた。

「しばらく私の下にいろ」

ベアトリッツの言葉に、アンデリートは目を丸くした。

「それは……」

「拒むならば、我が息子を名乗った罪に問おう」

アンデリートに否定権は無かった。

ベアトリッツは自室に戻ると、切れ者の家令に問うた。

「先ほどのアンデリートの話だが、何よりも恐ろしいのは……分かるな？」

「はい」

領主であるベアトリッツも知らなかったことを、サルデンは知っていたのだ。

「あいつの諜報力を見くびっていたかもしれん」

「もしかしたら、アンデリートがここにいることも、サルデン様はすぐに気づくかもしれませぬ」

「そうだな」

ベアトリッツは、サルデンとどう接していくべきか、考えあぐねていた。何としてでも、ヒューズレンを救わなくては。

「下手にサルデン様を刺激しない方が良いかと思えます。」

手を取り合うべきではないでしょうか」

「しかし」

ベアトリッツは険しい表情をした。

「あの者は危険だ。こちらを刺す剣にも、守るための盾にもなりうる」

「仰る通りです。しかし、正体が分からぬ以上、今は手元に置いておくべきです」

ベアトリッツはテーブルに肘をつくど、頭を抱えた。

「動くなら早い方が良いだろうが……」

ヴィクトワールは頷いた。

「はい。――サルデン様のような相手には、策略を巡らせること無く、正面から向かっていった方が功を奏するかもしれません」

「そうだな」

ベアトリッツは逡巡すると、手紙を書くべくペンを手に取った。

翌日、ヴィクトワールはシヴィル監獄を訪れていた。アンデリートが収監された監獄は、ここで間違いないはずだ。

「これです」

刑吏長が持ってきた帳簿をめくる。ヴィクトワールがドルチェグスで劇を見たのは、五年前。そして、リリア

ナ様の劇通いが終わったのも五年前。アンデリートが収監されたのは、五年前の一六七五年のあたりのはずだ。帳簿を調べているヴィクトワールに刑吏長は声をかけた。

「お掛けになってください」

「――ありがとうございます」

ヴィクトワールが椅子に座ってすぐに、探していた名前を見つけた。

(……あつた)

確かに、罪状は窃盗となっている。

「罪人の売買記録と、この男の裁判記録も持ってきてくれ」

刑吏長はヴィクトワールが指さしている名前を確認すると、頷いた。

「お待ちください」

刑吏長は、すぐに資料を持ってきた。

「ご苦労」

ヴィクトワールは裁判記録冊子から確認することにした。刑が確定すると、罪人の名前や年齢などの基本情報、出自、犯罪歴、罪状が書かれた紙が裁判所から監獄へ送られる。

一通りの情報を確認すると、ヴィクトワールは冊子を閉じた。

「そなた、この監獄に赴任して何年だ？」

いきなり質問を投げられた刑吏長は、恐る恐る答えた。

「二年でございます」

「五年以上ここに居る刑吏はいるか？ 連れてこい」

ヴィクトワールが売買帳簿でアンデリートの名前を確認してからしばらくしないうちに、刑吏長が四人の刑吏を連れてきた。

「この者たちです」

「ご苦労」

ヴィクトワールは刑吏たちの顔を見渡した。

「囚人が買われることもあるな？」

「はい」

囚人は安い労働力で、罪が軽微なものは買われていくこともある。

「四年前、背の高い色男が買われていったはずだ。アンデリートという男だ。覚えて居る者はいるか？」

刑吏たちは顔を見合わせた。

「体格に恵まれたり、見た目の良い囚人が買われていくことは多いので、覚えておりません」

「そうか」

アンデリートは、フィエルテ人に多い茶髪に青い瞳だ。

特徴的な髪色や目の色をしているわけではない。

諦めかけた時、一人の刑吏が、おずおずと手を上げた。

「その者なら覚えております」

ヴィクトワールは眉を上げた。

「そうか。しかし、あの者はフィエルテ人に多い髪と目の色をしているが、記憶違いではないな？」

「はい。恋人が、あの役者に夢中になっておりましたから」

「なるほどな」

これは、牢で散々鬱憤晴らしに使われたことだろう。

「その囚人が買われていった時のことを、覚えて居るか？」

「はい。囚人の売買は、皆の目に留まるような場所で行われることが多いですが、確か、あの男だけ別室で話していたはずですよ」

「ほう」

ヴィクトワールは厳しい声で尋ねた。

「その囚人を買いに来た者の特徴は？」

「確か四十前後に見える男でした。みすばらしい服を着ておりました」

変装したサルデン自身なのか、使いの者なのかは分からない。

有力な情報を話せた優越感からか、刑吏は饒舌になった。

「あの者は、すぐに監獄から出て行きたかったはずですよ」

「監獄に長くいたい者が居るか」

「そうですが……その、あの男は見てくれが良かったので」

「なるほど」

ヴィクトワールは、わざとらしく大きな声を出した。

「気の弱い者や美しい顔立ちの者は、狙われることが多いと聞いたことがあるが。それで、お前は暴行を止めたのか？」

刑吏は軽く笑った。まるで、何ともないように言い放った。

「囚人の通過儀礼のようなものですよ。わざわざ止めはしません」

ヴィクトワールの目が、冷たくなっていることに刑吏は気づかなかった。

「なるほど。牢の外にいれば被害者になるのに、牢の中にいれば被害者ではなくなるのだな」

あの男の弱みになりそうな情報は一通り手に入れることができた。そろそろ戻ろう。

去り際、ヴィクトワールは刑吏長に尋ねた。

「先ほど色々と喋っていた、あの男の名前は？」

「ザウインと申します」

「分かった」

後日、ザウインという刑吏が辺鄙な街に左遷された。

ヴィクトワールは、積極的にアンデリートと行動を共にしていた。それが監視目的であることをアンデリート

は分かっていたし、ヴィクトワールもまた、アンデリートがそのことを察していることに気づいていた。

「お前が手に入れたという帳簿には、何が書いてあった？」

「覚えている範囲で暗唱することもできますが」

ヴィクトワールは苦笑した。

「どれ、聞こうじゃないか」

人の記憶力など、たかが知っている。有益な情報はほとんど得られないだろう。

「一五二九年白露の月。アントニウス十三歳。五十ピュリー。身体が弱いため、減額。大寒の月。ヴィヴィアン十四歳。二百ピュリー……」

その後もアンデリートの言葉は続く。日付や人名だけでなく、脚注のような文言まで言うものだから、ヴィクトワールは思わず振り返った。

「……適当に述べているのか？」

「いいえ」

アンデリートは真面目な表情だ。

「覚えている範囲で申しました」

「まことか？」

「はい」

まさか、この男の言葉は真実だろうか。

「ついてこい」

ヴィクトワールは自室の机の中にしまっていた、羊

皮紙を差し出した。

「黙読しろ」

アンデリートは怪訝な表情を浮かべながらも、言われたとおりに目を通して見る。

「――そこまでだ」

アンデリートは紙から顔を上げた。

「紙を裏返し、今読んでいたところの文章を誦んじてみる」

アンデリートは深呼吸すると、紙に書かれていた文章を暗唱し始めた。まるで、紙を見ながら読み上げるように。

ヴィクトワールは興奮のあまり、鳥肌が立つのを感じた。――信じられない。アンデリートが、この文章を読んだことはないはずだ。これは、ヴィクトワールの書きかけの論文なのだから。

（これは）

ああ、この胸の高ぶりを、どうやって抑えよう。どうやら、とんでもない人物を拾ったようだ。

この男は、演技力だけでなく記憶力も並外れているらしい。この平民の男に、知識を授けたらそのような人物が生まれるのだろうか。

「お願いです、あの者に知識を授けることを、お許しください」

ヴィクトワールは主人に、昼間の出来事を話した。

ベアトリッツは眉を上げた。

「そなたがここまで言うのだから、よほどの人材らしいな」

ヴィクトワールは子供のころから、好奇心旺盛だった。その凄まじい探求心は、今は亡き彼の父を困らせるほどだった。

おまけに、ヴィクトワールは一度興味をわくと、とことん追求する節がある。

「しかし、あの者はサルデンのものだ。サルデンの出方次第では、あの者は我々の脅威にもなりうる」

「では、サルデン様と手を取り合うことができた際には、あの者に知識を授けてもよろしいでしょうか」

ヴィクトワールの性格は、ベアトリッツもよく分かっていた。

「教育するのであれば、あの者が私の強力な手札となるよう、徹底的に指導しろ」

*

アウヴェイスが主人の所へ戻った時には、外へ出ていた他の仲間も帰ってきていた。

「アウヴェイス」

カーリーナだ。カーリーナは、デリシア派筆頭貴族のギル

ベインの下にメイドとして潜伏していたはずだ。

「もう戻ってきていたんだな」

「ええ。疫病を偽造して、戻ってきたわ」

ヨロモ草のしぼり汁を使えば、一時的に発疹を起こすことができる。

「発疹も……治まったようだな、良かった」

「ありがとう」

それからカリーナは表情を和らげた。

「良かった、貴方は戻ってきて」

「……私『は』？」

「フェニールが戻ってきていないのよ」

アウヴィスの胸に、不安が生まれた。

フェニールのことを信用しているか自信を持って言えはしないが、少なくとも仲間意識はあった。

「……心配だな」

「ええ」

カリーナの伏せる目が悲しげだ。

「ところで、バイサ孤児院の帳簿は手に入れたの？」

「ああ」

アウヴィスは帳簿をカリーナに差し出した。

「見ても良い？」

アウヴィスは頷いた。

カリーナはパラパラと帳簿をめくっていたが、ある頁の所で手が遅くなった。

「……サルデン様は何故、孤児院の帳簿を欲しがったのかしら」

カリーナの声が震えていることに、アウヴィスは気づいていた。

(カリーナはバイサ孤児院にいたのかもしれない)

アウヴィスたちは、互いの素性を、過去を探ろうとはしない。誰が決めた訳でもないが、それは暗黙の了解となっていた。皆隠したい過去を持っているのは明らかだから。

カリーナもフェニールも恐らく「ヒュースレン」の話を知っていたことがあるだろう。そして、二人ともアウヴィスの本名に勘づいているに違いない。

自分の秘密を隠し通せることはないのかもしれない。ヒュースレンは、ベアトリッツに見られたことを思い出していた。

カリーナが主人に呼ばれたのは、それから半刻もしない時だった。

カリーナは主人の部屋に入ると、一礼した。

「お呼びでしょうか」

「ああ」

サルデンはカリーナに帳簿を差し出した。

「バイサ孤児院の帳簿だ。本物かどうか確認しろ」
頁をめくっていると、知っている名前が出てきた。シ

エリカ十四歳。二百ピュリー。

「……」

指先が震えてきた。幼い頃、再会を誓った友は、たった二百ピュリーで売られたのだ。

おそらく、もうすぐカリーナの本名も出てくるだろう。知りたくない。知るのが怖い。自分がいくらで売られたのか、知りたくない。

恐る恐るカリーナは頁をめくった。

スザンナ。カリーナの本名だ。——自分は、二百ピュリーで売られたのだ。

耐え切れず、カリーナは口元を手で覆った。身体の震えと吐き気が止まらない。

「そなたには酷な仕事だったな」

「……これは本物です」

「そうか。もう戻って良い」

主人の部屋を後にしてからも、孤児院の帳簿の文字が頭にこびりついている。たった二百ピュリー。

自分の身体は、人生はそれだけの価値しか無かったのか。純潔を奪われてから二十年近く。

カリーナは胸を押さえて、その場にしゃがみこんだ。自分の人生は一体何なのだろう。少女の頃訳が分からなまま客を取らされ、今も体を使って諜報を行っている。はるか昔に封印したはずの、どうしようもない哀しみが込み上げてきた。

散々男に身体を許してきた自分は、汚れている。

「あ……」

気づいた時には、涙が零れていた。

「あああ、あああああああ！」

胸を押さえて、カリーナは崩れ落ちた。どれほど慟哭しようとも、哀しみは消えない。

悲しい。憎い。悔しい。孤児院の経営者を殺してやりたい。

「……」

本当に殺していいのではないか。カリーナも、人を殺めたことはある。カリーナの仕事は諜報だけではなかった。

殺す前に、知らなければいけないことがある。

知らなくてはならない。バイサ孤児院のことを。辛い記憶を呼び起こさないよう、ずっと自分の過去から目を背けていた。しかし、これ以上自分の過去を避けることはできないだろう。

（そもそもバイサ孤児院はまだあるのかしら？）

人身売買帳簿がある、ということとは、まだ孤児院もあるのだろう。孤児院のことを調べなければ。孤児院はコルタナにある。しかし、家来が勝手な行動をとることをサルデンは許さないだろう。

カリーナは主人の部屋に戻ると、深く頭を下げた。「コルタナへ行かせてください。孤児院の裏に誰がいる

のか……突き止めてみせます」

*

コルタナを訪れるのは、約二十年ぶりだった。かすかな記憶と聞き込みを頼りに、スザンナは孤児院を目指した。

(あつ……)

何度目かの角を曲がった時、緑色の看板のパン屋を見つけた。店の外装と、甘い香りを嗅いだ瞬間、記憶が洪水のように溢れ出てきた。

スザンナが孤児院にいた時から、このパン屋からは毎日美味しそうな香りが漂っていた。窓から見える、ふつくと焼きあがったパンが、柔らかさそうで温かそうで、毎日生唾を飲み込んでいた。

どんな味なんだろう？ 甘いのかな？ 中には何か入っているのかな？

色んな想像をしながらスザンナは指をくわえていた。孤児院にいた頃は、お小遣いを支給されることはなく、お金を全く持っていなかった。

そこで、スザンナは店の主人に頭を下げた。

「お願いします、お店のお手伝いをさせてください！」いきなり現れた小娘に、店の主人は迷惑そうに顔をしかめた。

「人手なら足りているよ。さ、帰った、帰った」

それでもスザンナは諦めなかった。五日連続で懇願すると、店の主人は折れた。外出できる時間は限られていたため、スザンナは短い時間の中で、一生懸命パンの配膳や雑用をこなした。

何日か働いてスザンナは、やっと念願のものを手に入れた。

「ほら、これが欲しかったんだらう？ ありがとう、助かったよ」

その時は本当に嬉しかった。早速、道端で頬張ったのだが、クリームがぎっしりと入った、ふわふわのパンは、びっくりするほど美味しかった。

スザンナは懐かしさのあまり、パン屋のドアを開けた。「いらっしやいませ」

内装やパンの配置は、うろ覚えだが、あの時食べたクリームパンだけは未だに覚えている。あの頃と見た目は変わっていない。

スザンナは購入したパンを、人気のない所で食べた。味もそのまま、懐かしいやら悲しいやら、様々な感情が押し寄せてきて、涙を堪えるために俯きながら食べ進めた。

パンを食べ終わると、再び孤児院を探し始めた。確か、この通りで合っているはずだ。進むにつれて、家や店が少なくなってきた。

(…：あった)

自分がいた頃と比べて、外装が少し変わっている。建物の壁には「バイサ孤児院」と書かれた看板がついている。

孤児院の扉が開くのが見え、咄嗟にカーリーナは外壁に身を隠した。

「さあ、外遊びの時間よ」

孤児院の従業員らしき女性に続き、子供たちが外に飛び出してきた。従業員はスザンナが知らない人物だ。

今無邪気に遊んでいる子供たちは、自分たちが売られるとは思ってもいないだろう。子供たちの将来を思うと、胸が締め付けられた。

バイサ孤児院が、カルティエ修道院の援助を受けていることまでは、突き止めた。従業員は誰に雇われているのだろう。修道院から派遣されているのだろうか。

いきなり従業員に探りを入れるより、街の人に、孤児院の情報を聞き出した方が良さだろう。

スザンナは大通りに戻ると、気の良さそうな五十前後の女性に声をかけた。

「すみません、この街に孤児院があると聞いたのですが…」

女性は虚を突かれたような顔をしている。

「あるけど…」

「私、養子をとろうと考えているんです。夫との間に子

供ができなくて…」

スザンナの嘘を信じた女性は、労わるような表情を見せた。

「まだ若そうだし、諦めなくても…」

スザンナは首を振った。

「結婚して五年以上経つんです。自分たちの体力を考えると、今のうちに子供を引き取った方が良いと思いまして」

「そう。それなら、止めはしないけど。この孤児院あまり良い噂を聞かないのよ」

「え？」

女性は周囲を見渡すと、声をひそめた。

「子どもたちは、ある程度大きくなったらきな臭い所に売られていくみたいなの」

「きな臭い所？」

「そう。女の子は娼館に、男の子は人身売買所に」

スザンナは心が冷え切っていくのを感じた。

「分かりました。色々教えてくれてありがとうございます」

女性は笑みを浮かべた。

「良いのよ！ あなたも良い出会いがあると良いわね」

女性が去った後も、スザンナは立ちすくんでいた。

(子ども…)

スザンナが初めて妊娠したのは、サルデンに引き取ら

れて一年もしない時だった。妊娠に気づいた時、随ろそ
うと思った。しかし、どれほど小さくても命が自分の体
に宿っていると考えると、決心ができず月日が経ってい
った。

そのうち、主人も気づいた。

「そなた、身ごもっているのか？」

スザンナは片膝をついて、頭を下げた。

「申し訳ございません！ 近日中に墮ろしてきます」

「いや」

サルデンは冷たい笑みを浮かべた。

「子ども使える」

「え……？」

数か月後、スザンナは男児を生んだ。初めて産んだの
は、白銀の髪の毛の生まれつき左頬に痣がある子だった。

スザンナは左手首に巻いてある、赤いブレスレットを
握りしめた。バイサ孤児院にいた頃、友と再会を誓って
交換したブレスレットだ。

辛いとき、苦しいときに、いつもこのブレスレットを
握っていた。

——あの子は、元気でいるだろうか。

*

カリーナがコルタナにいる頃。サルデンは客間で、正

妻のリゼルと共に客人を出迎えた。

「急な来訪申し訳ない」

サルデンは笑いながら首を振った。

「とんでもございません。精一杯歓迎させていただきます」

サルデンは、あまり父親に似ていない。見た目の話で
はなく、立ち居振る舞いが、彼の父親とは似つかないの
だ。サルデンの父は、どちらかと言うと小心者のような
印象があつた。しかし、サルデンは獲物を狙う鷹のよう
に眼光を光らせ、自信に満ち溢れた言動をする。

「少し二人で話したいのだ」

「——良いでしょう」

サルデンは、リゼルに目配せした。

リゼルは夫と客人に一礼すると、部屋から出て行った。

「どうぞ、お掛けください。……それと、何かお飲みにな
りますか？」

「何でも良い」

「キルケニー。果実酒をお持ちしろ」

サルデンの家令は、すぐに果実酒を持ってきた。

「実は、最近ヒュースレンにそっくりな男を見かけたの
だ」

グラスに注がれていく果実酒を眺めながら、ベアトリ
ツは切り出した。

「他人の空似ですか」

ベアトリッツはグラスに口付けた。

「何でも、その男は、お前の家来の一人らしい」

サルデンは口角を上げた。

「どうやら、吠えたてた犬がいるようです」

サルデンは何でもないように、笑っている。ヒューズレンを家来として扱ったことをバレても、恐れていないようだ。

「ベアトリッツ様の所に迷い込んでいましたか」

「そうだな」

「そなたの望みは何だ？」

サルデンは笑みを消した。野心に満ち溢れた青い瞳が、ベアトリッツを覗き込んでいた。

「デリシア派を抑え込み、我が家名を高めることです」

「なるほど。では、我々の望みは合致するな。手を取り合おうではないか」

サルデンはニヤリと笑った。腹の底が見えない、不気味な笑みだ。

「手を取り合うも何も、我々は同じ派閥の人間ではありませんか」

「では、ヒューズレンに会わせろ」

「分かりました。——キルケニー！」

サルデンの家令が姿を現した。

「お呼びでしょうか」

「アウヴィスを呼んで来い」

「かしこまりました」

キルケニーは一礼すると、部屋から出て行った。

「……よくもまあ、自分より爵位が上だった人間を、使えるものだ」

「では、ベアトリッツ様なら、ヒューズレン様を助けられたとお思いですか？」

サルデンの目が、鋭くベアトリッツを射抜いた。

「ヒューズレン様が馬車馬のように酷使されるのを防いだのは、私ですよ。お考え下さい、下層階級の者は、家畜同然の待遇を受けるではないですか。私は、下層階級の者なら着れないような服を与え、給金も渡していたのです。もし、デリシア派の人間に買われていたら、鬻り殺されていたかもしれません」

ベアトリッツは何も言えなかった。人身売買所に売られたヒューズレンを救えなかったのは、ベアトリッツの落ち度だ。

ドアを叩かれた後、ヴィクトワールの声がした。

「ヴィクトワールです」

「入れ」

ヴィクトワールはアンデリートを伴って入ってきた。アンデリートは部屋に入るなり、片膝をついてサルデンに一礼した。

「サルデン様」

「久しいな、フェニール。……いや、今は本名を名乗っ

ているのか？」

「アンデリートの弁明を許さないように、サルデンは続けた。」

「戻りが遅いと思ったら、まさかベアトリッツ様の所にいたとは」

「ヒュースレンと話しているのを見かけた、我々が無理矢理捕らえたのだ」

「まるで、アンデリートを庇うような発言だった。サルデンが口を開きかけた時、ドアが叩かれた。」

「キルケニーです。……ヒュースレン様をお連れしました」

「入れ」
ヒュースレンはベアトリッツの姿を認めると、目を見

開いた。
「ヒュースレン」

ヒュースレンは、戸惑うように主に視線を移した。どのように反応して良いのか分からないようだ。

「ベアトリッツ様は全てご存じです。——ヒュースレン様」

ベアトリッツは立ち上がると、親友の息子に近づいて行った。

「ヒュースレン！」
ベアトリッツはヒュースレンを抱きしめた。

「よく……生きててくれた」

ヒュースレンもベアトリッツの背に腕を回した。

「ベアトリッツ殿……」
「すまない、お前と家族を救えなくて。すまない、お前に……このような道を歩ませてしまった」

ヒュースレンは嗚咽を漏らした。あれから八年。やっと、心の底から父と自分の無実を信じてくれる人物と再会できた。

ヒュースレンは、ベアトリッツから体を離した。
「ベアトリッツ殿、何故こちらに……？」

それから、ヒュースレンは仲間に視線を向けた。
「それに、何故フェニールと一緒にいるのです？」

ベアトリッツは、これまでの経緯をヒュースレンに話した。

「なるほど……。私も、まだ詰めが甘かったです。まさか、ベアトリッツ殿たちに見られていたとは」

サルデンに勧められるがまま、ヒュースレンは椅子に座った。

「サルデン、もう一つ頼みごとを聞いてくれるか？」

「何なりと」
ベアトリッツはアンデリートに視線を向けた。

「この者は、私が預かって良いか？ 贖罪のためにも、この者には働いてもらいたいのだ」

ヒュースレンは不安そうな目を、アンデリートに向けた。

「何をしでかしたんだ？」

「色々と」

サルデンは声を上げて笑った。

「分かりました。どうぞ、好きなだけ手元に置いてください」

「ところで」

ベアトリッツは真剣な表情で尋ねた。

「何故、孤児院の人身売買帳簿を探していたのだ？」

「訳を話す前に、今一度確認しましょう」

サルデンは足を組みなおした。

「ファセラン様とヒュースレン様が処罰されたのは、第一王子のジェーソン様を廃そうとしたことが理由でしたな」

ヒュースレンはぎこちなく頷いた。八年前、ヒュースレンは突然捕縛された。どれほど痛めつけられても、第一王子を廃そうとした罪状に、身に覚えはなかった。

「妙だと思いませんか？」

「妙とは？」

ヒュースレンは厳しい声で聞き返した。

「謀反の罪を犯したとされる者は、歴史を紐解いてみれば、他にもおられます。しかし、それらは時の王を廃さんと企てたとされています。…罪を作り上げるならば、普通、陛下を亡き者にしようとしたと、でっちあげるのでは？ 何故、陛下でなく王子である、ジェーソン様に

目を付けたのか」

確かに、不自然だ。

「謀反を起こそうと企てた者は、秘密裏に武器を大量に用意していたとか、王を毒殺しようとする意図していた毒が見つかるとか、物的証拠があったと言われています。それらを用意するのが手間で、ジェーソン様に狙いを定めたのでは？」

最初に口を開いたのは、歴史学者でもある、ヴィクトワールだった。

「そうだな。しかし、他にも不思議な点がある。確かに、ファセラン様は我々サロンド派の筆頭貴族でした。ですが、私が政敵ならば、ファセラン様より、第二王子の叔父である貴殿を狙うでしょう」

「何が言いたいのですか？」

ヒュースレンは、額が強張っているのを感じた。

「ファセラン様は、何かしら行動しようとしていたのではないですか？」

「ふざけるな！」

ヒュースレンは、今にもサルデンに掴みかからんとする勢いで、身を乗り出した。

「父が罪を犯したと言いたいのか!？」

「ご気分を害されたのであれば、お許しください」
サルデンは至って冷静だ。

「清廉潔白なファセラン様が、理由も無くジェーソン様を廃そうとするわけがありません。……そこで、孤児院の帳簿が出てくるのです」

「……まさか」

ヒュースレンは唇を震わせた。あまりに信じられない推測が迫ってきて、身体の震えが止まらない。

「ジェーソン様は……陛下の御子ではないのか？」

「ジェーソン様が、その孤児院から引き取られた子であると言いたいのか？」

ベアトリッツも目を見開いている。

「まだ、確かな証拠は揃っていません。しかし、バイサ孤児院はカルティエ修道院の支援を受けているのですが……三十数年前に、その修道院は、急に資金繰りが良くなったそうです」

ジェーソンは今三十四歳だ。

「もちろん、それだけで推測を述べているわけではありません。孤児院の帳簿を取りに行きますので、少々お待ちください」

サルデンが部屋を出ても、誰も何も言わなかった。

雨が降ってきたようだ。雨粒が、激しく窓に叩きつけられる音がしている。

「父は……本当にジェーソン様を廃そうとしたのでしょうか」

ヒュースレンは両手で自分の顔を覆った。

「分からぬ。今は、まだ、何とも……」

結局、サルデンが戻ってくるまでの間、それきり誰も口を開かなかった。

「お待たせいたしました。——これが、件の帳簿です」
サルデンは帳簿をテーブルに乗せると、頁をめくっていく。

「……ありました。ここです」

サルデンが示した箇所には「一六四六年仲夏の月十八日。赤子 七十万ピュリー。八割は修道院へ送る」と書かれていた。

「何だ、この金額は……!？」

ベアトリッツは驚愕のあまり目を丸くした。にわかには信じがたい額だ。しかも、赤子に。

「なるほど、口止め料込か」

ヴィクトワールが呟いた。

「サルデンの推測を信じるか？」

「言い切るには、まだ調査が必要です。しかし……ありえない話でもなさそうです」

「しかし、本当にジェーソン様が孤児院の子供だとして、ファセランは、そのことを知っていたのか？」

「ベアトリッツ様も、ファセラン様から何も聞いていませんか？」

「ああ」

「なるほど。実は、ファセラン様が、ジェーソン様が陛下の御子ではないと勘ぐっていた証拠は、見つけられていないのです。——ジェーソン様が陛下の御子かどうか、そして、ファセラン様が本当に何か画策していたのか：それは、まだ調べ中です」

ヒュースレンは、手を握りしめた。あまりのことに思考が纏まらない。

「そなたが何を調べていたのかは、よく分かった。——これからは私も協力しよう」

サルデンは満足そうに頷いた。

「ベアトリッツ様がお力添えしてくださるならば、心強いです」

それから、サルデンはヒュースレンに視線を向けた。

「さて、ヒュースレン様いかがされますか？ 私の下にいるか、ベアトリッツ様の所へ行かれますか？」

ヒュースレンは顔を上げた。まだ指先が強張っている。

「え……」

「我々は同じ秘密を共有した同士。無理に私の所にいる必要はございません」

皆から視線を向けられて、ヒュースレンは戸惑いながら首をかしげた。

「カリーナはどうなるのです？」

ベアトリッツから問いを含ませた視線を受け、サルデンは説明した。

「カリーナは私の家来です。アンデリートやヒュースレン様と同様の任務をしております」

サルデンは続ける。

「カリーナは、引き続き私の下で働いてもらいます」

それもそうだ。ベアトリッツからしてみたら、カリーナを引き取る理由が無い。

「私はここに残ります」

ベアトリッツが身じろぎした。サルデンも意外そうに片眉を上げている。

「本当によろしいのですか？」

「はい」

「ヒュースレン」

ヒュースレンは、ベアトリッツの、言外の意味を含めた視線を受け止めた。ヒュースレンの表情を見て、何か考えがあつての選択だろうと、ベアトリッツは口をつぐんだ。

話が一段落したと判断するや、サルデンは雰囲気や和らげるよう、わざと明るいう声で言った。

「話はこれくらいにしましょう。長旅でお疲れでしょう。

今日は、ごゆっくりおくつろぎください」

夜になると、アンデリートはヒュースレンの部屋を訪れた。今思うと、ヒュースレンの部屋は、アンデリートのものより広い。それに、調度品も従僕が使うものにし

ては高そうなものばかりだ。

「まあ、掛けたまえよ」

アンデリートはヒュースレンの言葉に従わず、一礼した。

「改めて申し上げます。私の本名はアンデリートです。以前は……役者をしていました」

「役者」

驚いたように、ヒュースレンは大きな声を出した。

「君ほどの美男子なら納得だな。——ああ、そういえば、君の部屋には戯曲の本が何冊か置いてあったな」

元貴族だけあって、ヒュースレンは教養がある。

ヒュースレンも立ち上がった。

「丁寧にありがとう。私はヒュースレンⅡガイザック。

……まあ、本来なら今は、苗字は名乗れないのだが」

フィエルテ王国で苗字を持つことが許されるのは、有力者だけだ。下層階級に落とされた時点で、ヒュースレンは苗字を剥奪されている。

「ヒュースレン様は」

「待ってくれ」

ヒュースレンは慌てて言った。

「周りに人がいないときは、今まで通りに接してくれ。

私の身分は回復していないし」

「ですが」

「カリーナも合流していないではないか。ほら、そなた

だけ抜け駆けするののか？」

アンデリートは苦笑した。そうは言いながらも、話し方が上流階級のものになっていることに、ヒュースレンは気づいているだろうか。

「分かった。じゃあ、とりあえず今まで通りってことで」

「ああ」

「本当に、ここに残るのか？ ベアトリッツ様は、お父上のご友人なのだろうか？」

「大丈夫だ。君こそ、気を付けたまえ」

ヒュースレンは声を低くした。

「ベアトリッツ殿に、私の現状を話したことをサルデンが許しているか分からないのだから」

それは、アンデリートも考えていたことだ。

「しかも、君は何かしでかしたそうじゃないか。向こう

に行っても用心したまえよ」

アンデリートはようやく笑った。

「気を付けるよ。——そうだ、ベアトリッツ様やヴィクトワール様について教えてよ」

新しい主人については、少しでも知っておきたい。

「そうだな……。とりあえず掛けたまえ」

ヒュースレンは椅子に座ると、足を組んだ。

「ヴィクトワールは大学まで出た学者でもあるんだ」

「それ、僕も気になっていたんだ。何やら論文を書いていたそうなんだが……。そうか、学者だったのか」

ヒューズレンはアンデリートの一人称が変わっていることに気づいた。心なしか「フェニール」の頃より、雰囲気も柔らかくなっていく気がする。

「家令にしては珍しいだろう？ 何でも、ヴィクトワールの探求心を見込んだベアトリツツ殿が、ヴィクトワールの父親に、彼を大学へ行かせることを勧めたらしい。そのおかげもあって、ヴィクトワールの忠誠心は山のようには揺るぎないものになっている。ベアトリツツ殿は見ての通り、威圧感のある方だが、君が無礼を働かなければ手荒なことはしないはずだ」

ふいにアンデリートは、この場にはいない、もう一人の仲間のことを思い出した。

「ところで、カリーナは今どこにいるんだ？」

「コルタナだ。バイサ孤児院を調べているらしい」

フェニールは固い声で尋ねた。

「なあ、諜報活動を行っているのは、私たちだけだと思うか？」

アンデリートは眉をひそめた。

「それは……僕も考えたことがある。僕たちが知らない情報を、サルデン様は仕入れている時があるからな。カリーナが、手に入れた情報の全てを共有していない可能性も否定できないけど……」

アンデリートの口ぶりは、カリーナを疑いたくないようだった。アンデリートにも仲間意識はあるようだ。

「そうだな。でも私は、疑念を確かめておきたいんだ」
サルデンは、本当に信頼して良い味方なのか。カリーナは自分たちに隠していることはないか。それを調べないうちに、サルデンの下を去ることはできないだろう。

*

ジェノヴァに戻ると、アンデリートは正式にベアトリツツの従僕になった。

その日は、アンデリートは、ヴィクトワールに連れられ街に出ていた。ベアトリツツの服の仕立てを依頼するためだ。

目的の店に入ると、誰もいなかった。

「すいません！」

アンデリートの声は、よく通る。

店の奥から応答する女性の声が聞こえてきた。

ややあって、年若い娘が出てきた。

「お待たせしました」

出てきた娘の顔に見覚えがあった。

教会でハンカチを拾ってくれた娘だ。どうやら、吹き出物は治まったようだ。娘の方もアンデリートのことを覚えていたらしく、小さく口を開けた。

娘の様子に、ヴィクトワールはアンデリートに顔を向けた。

「知り合いか？」

「以前、ハンカチを拾ってもらったことがあります」

アンデリートは娘に尋ねた。

「すみません、チエルシーさんは、いらっしやいますか？」

「父は……数か月前に亡くなりました」

「それは、お悔やみ申し上げます」

アンデリートは年若い娘を悼むように、言葉だけの哀悼の意を述べた。演技は得意だ。

「父に何か御用でしょうか？」

「ベアトリツツ様の服を仕立ててほしかったのだ。しかし、御父君がいないのなら仕方ないな」

「――私が代わりにやるのは駄目ですか？」

「そなたが？」

ヴィクトワールは怪訝そうに眉をひそめた。

「そなたは、自分が父親と同じほどの腕前を持っていると言いつけるのか？」

娘がたじろいだ。

アンデリートも職人の家に生まれた。自分の力量を示したい、親と同じくらいの仕事をこなすことができることを証明したい気持ちには分かった。

十代の頃、職人だった頃の自分と娘を重ねていた。

「試しにやってみさせても良いのではないですか？」

「アンデリート」

ヴィクトワールの困った様子とは対照的に、娘は明る

い笑みを浮かべた。

「ありがとうございます！」

娘はヴィクトワールに詰め寄った。

「お願いします。どうか、私に仕立てさせてくださいませんか」

フィエルテは厳しい声で言った。

「良いか、よく考えてものを言え。お前の出来によっては、父親の顔に泥を塗ることになるんだぞ」

娘は怯えたように顔をひきつらせた。

アンデリートは、年若い娘が少し憐れになり、近くに展示されていたジャケットの袖をとった。

「お嬢さん、これは貴方が仕立てたものですか」

「はい」

「……ふむ」

ヴィクトワールは生地を何度も触りながら、考えている。服を様々な角度で見ながら、ヴィクトワールは頷いた。

「なるほど、確かに腕は良さそうだな」

ヴィクトワールは娘に向き直った。

「お嬢さん、名前は？」

「私は、エレミーと申します」

エレミーは慣れた手つきで採寸をしている。

「納期は一月後だ。報酬は、出来上がりを見てから渡す」

「かしこまりました」

エレミーは一礼すると、仕事道具を片付け始めた。

「アンデリート、出口まで案内してやれ」

「はい」

アンデリートとエレミーは並んで歩きだした。

「あれから、教会にはお見えになりませぬね」

アンデリートはエレミーを一瞥すると、目を伏せて答えた。

「あの日は気が向いて赴いただけだから」

「そうですか」

「君は頻繁に行っているのか？」

「はい。両親とも信心深かったのです」

娘の言葉で、ふと、両親のことが気になった。両親は元気にしているだろうか。

「あの……ありがとうございます、ベアトリツ様の服を仕立てる機会をくださって」

アンデリートは娘に視線を向けた。

「大したことないよ」

「私、必ず、父の名誉を傷つけないような服を作ります」

「頑張ってください」

アンデリートは微笑した。役者だった頃、婦人たちに散々見せた上辺だけの笑みだ。

「はい！」

エレミーは、アンデリートの言葉に感情が込められて

いないことに気づかない様子で、屈託なく笑っている。

娘の明るさが、ほのかな罪悪感を生んだ。

そして、従僕の仕事の他にも、始まったことがある。

「今日から私の講義を受けてもらおうぞ」

アンデリートは眉をひそめた。

「どういうことですか？」

「そのままの意味だ。どうやらお前は、とてつもなく記憶が良いらしい。そんなお前に知識を授けたら、どんな人物が生まれるのか……私の探求心がうずいたのさ」

ヴィクトワールは書物をめくり始めた。どうやら本気のようなのだ。

「しかし……平民の私が知識をつけて良いのでしょうか？」

「安心しろ。ベアトリツ様も前向きだ」

ヴィクトワールは書物を差し出した。

「これは数年前の法律が書かれた本だ。改正されて、一部の法は変わっているがな」

表紙をめくるアンデリートに、ヴィクトワールは声をよこす。

「姦通罪を調べてみる」

胸の中に、言いようのない哀しみが出てきた。アンデリートの表情を見て、ヴィクトワールは素っ気なく言った。

「お前の過去を責めるつもりはない。良いから刑法三十

八条の項目を読んでみる」

アンデリートは頁をめくり、刑法の項目を探した。

刑法三十八条。不義を犯した男は、五千ピュリー夫又は妻に支払う。女は二日の晒しの後、四千ピュリー夫又は妻に支払う。

アンデリートはハツとして顔を上げた。

「男女で処罰内容が違う」

「そうだ。お前が民事裁判で負けたのは、主演女優の証言が決め手だったな」

「はい。でも、私は、あの女と不貞を犯したことはありません」

ヴィクトワールは足を組みなおした。

「自分も責められるだろうに、その女優が嘘の証言をするのは考えにくい。おそらく、脚本家の夫は法律に明るかったんだろう。そして、妻を姦通罪で訴えると脅した可能性もある」

役者をやっていたころ、晒しの刑を受けている罪人を見たことがある。観衆は汚い言葉やものを罪人に浴びせていた。汚物をぶつけられている罪人が哀れで、それ以上見ていられなかった。

ふいに、アンデリートのヒュースレンの姿が浮かんだ。ヒュースレンも同じ目に遭ったのか。

「どうだ、知識は自分を助けてくれる。私の講義を受けてみたくなっただろう？」

アンデリートは頷いた。

三日後、アンデリートはエレミーの店を訪れた。

二月後の王妃の生誕を祝う宴が、王宮で行われる予定なのだが、ベアトリッツはアンデリートも連れて行くつもりだ。そこで、礼服を用意するよう言われたのだ。ズボンとシャツは今履いているものでも大丈夫だろうが、ジャケットかベストは新調したい。

「やあ、お嬢さん」

アンデリートは少し機嫌が良かった。礼服の準備金をもらっていたからだ。

エレミーはアンデリートに気づくと、首をかしげた。

「何か指示がとおりですか？」

ベアトリッツの服のことを言っているのだ。

「違う。今日は、自分の服を買いに来たのさ」

アンデリートは展示されていた上着を手にとった。派手な装飾はされていないが、細部まで刺繍がされており丁寧に作られている。

「ベアトリッツ様の服は、順調かい？」

エレミーはニッコリと笑った。可愛らしい、愛嬌のある笑顔だ。

「はい。ご期待に添えられるよう、頑張ります」

エレミーにつられて、アンデリートも笑みを浮かべた。

「応援してるよ」

貼り付けたようなものではないアンデリートの笑顔を見て、エレミーは胸が高鳴った。

「羽織ってみても良いかい？ ああ、それと、あの黒いベストも試したいな」

「どうぞ」

エレミーはベストを渡した。

「ありがとう」

まず、鏡の前でベストを着てみる。これだけでも格式張って見えるが、二月後には、これだけだと寒いだろう。

アンデリートは青いジャケットも羽織った。

「……もう少しアクセントが欲しいな」

「それならケープはいかがですか？」

エレミーは、アンデリートの肩にケープを押し当てた。

「——良いね。服が一層映える」

アンデリートは視線をずらしながら、右肩に手を伸ばした。

アンデリートとエレミーの視線が絡め合った。エレミーは息を呑んだ。通った鼻筋に、どこか翳のある青い目。

アンデリートの顔が、恐ろしいほど魅力的に見えた。

アンデリートはエレミーの様子を気に留めることも無く、ケープを羽織った。ケープがあればベストはいらない気もするが、この際だ、全て買ってしまおう。

「この三点でいくらだ？」

「三十ピュリーです」

準備金の範囲で収まりそうだ。

アンデリートは財布から硬貨を取り出しながら、尋ねた。

「この辺でおすすめの水屋はあるかい？」

役者だった頃は、ハンカチに香水をつけていた。準備金からではなく、自分の財布から捻出するつもりだ。

「ここを出て右に真っ直ぐ進むと、『フローラ』というお店があります。そこなら種類も沢山ありますし、人気ですよ」

「君がつけているのも、そこのお店の物か？」

エレミーは微かに頬を染めた。

「あれ、香水つけているって、よく気づきましたね」

「ああ。さっき、ケープを受け取った時にね。ローズ？

ゼラニウム？」

「ローズです。凄い。香水好きなんですね」

アンデリートが、女性に人気のある香りに詳しいことが、何を意味するのかエレミーは気づかなかった。

「私もフローラさんで買っているんです。……はい、三十ピュリーぴったりですね」

「僕も寄ってみるよ。良い服をありがとうエレミー」

アンデリートが店を後にした後、エレミーは、どこか浮ついた気分だった。

*

女性にしては高い背丈、氣丈そうな整った眉に、人目を惹くような美しい顔。マリードは元女優の記者だ。

現在のフイエルテ王国は、身分に関係なく読み書きを学べる。識字率が高まるにつれ、新聞の需要も高まってきている。夫が劇作家だった影響もあるのだろうか、マリードが書く記事は分かりやすい、と評判だ。

マリードは五年前、裁判で嘘の証言をした。その結果、被告は多額の賠償金を支払わなければならなくなった。真実を世に伝えたい。それが、自分ができるせめてもの償いだと言いつけている。

今日は、上司のドルイドと共に、領主のデザイナー家の屋敷に訪れている。当主のリビュート・デザイナーに第一子が誕生したのだ。

執事と侍女から話を聞いていると、若者が現れた。

「おや、客人か？」

執事と侍女は男性に一礼した。

「あ、貴方は……」

上司は目を見張っている。

「ギルベイン様のご子息の、アルベルティ・キュリオス様でしょうか？」

若者は頷いた。アルベルティは、リビュートの正妻シエリゼの兄だ。

「そうだが、お前たちは何者だ？」

「私は記者のドルイドと申します。こちらは同じく記者

のマリードです」

アルベルティはマリードの顔を見ると、眉を上げた。

「こんな美しいご婦人が、記者なのか？」

アルベルティは笑いながら言った。

「勿体ないな。いっそ、女優にでもなったらどうだ？」

マリードは微笑を浮かべた。

「女優なんて……。演技ができれば務まりませんわ」

この言葉に嘘は込められていない。

「ところで、アルベルティ様はどのような御用でいらっ

しゃったのですか？」

ドルイドが口を挟む。

「姪の顔を見ると、義弟と話があって来たのだ」

アルベルティから別邸への招待状が届いたのは、それから数日後のことだった。

招待された理由が分からず、考え込んでいるマリード

に、上司は急ぎ立てた。

「何を迷っている。応じなければ、無礼だと処罰されるぞ」

腑に落ちないが、上司の言い分は正しい。マリードは覚悟を決めた。

アルベルティの部屋に通されると、マリードは片膝をついて深く頭を下げた。

「ご招待ありがとうございます」

「掛けてくれ」

マリーダが座ると、アルベルティは机に置かれている箱を手で示した。

「開けてみる」

言われるがまま、マリーダは箱のふたを開けた。中には、ピンクの布を基調とした服が入っていた。持ち上げてみると、シンプルな作りだが、細かな刺繍が施されたドレスであることが分かった。

「これは……？」

「そなたにやろう」

マリーダはハツとして顔を上げた。

「――何が望みですか？」

アルベルティは薄く笑った。

「話が早くて助かる。秘密裏に調べてほしいことがあるのだ」

マリーダは警戒しながら、しかし、それを見せることはなく尋ねた。

「何でしょうか？」

「我が父、ギルベインの現在の正妻は、誰か知っているか？」

「確か……レティシア様ですよ」

「左様。では、レティシア殿が誰の妻だったか知っていますか？」

「――ヒュースレンの妻だったと聞いております」

マリーダも、ガイザック父子が謀反を企てた事件を知っている。

「そうだ。レティシア殿は、ヒュースレンが捕らえられると奴の判決が出る前に離縁し――父と再婚したのだ。そして、数か月後には娘を生んだ」

アルベルティは渋い表情をする。

「おかしいと思わないか？ 父とレティシア殿の娘は、実は、ヒュースレンとの子供である可能性があるのではないか？」

異母妹のコルネリアは、ギルベインに似ていない。二年ほど前だろうか、アルベルティが疑惑を深めたのは。あの理知的な顔つき、あれはヒュースレンに似ている。

「まさか……」

「貴族の醜聞を調べるのは、記者なら得意だろう。真相を記事にしてほしい訳ではない、私にだけ教えてくれれば良いのだ」

「ですが」

マリーダは困惑しながら続ける。

「それにしても対価としては大きすぎます。それに……」

マリーダはドレスに視線を落とした。

「何、子供の一人が自分の子でなかったとしても、父が困ることは無いだろう」

アルベルティは苦笑しながら杯を傾けた。

「父には沢山子供がいるわけだし。それよりも、万が一

逆賊の子を育てていた場合、そちらの方が問題だ」

「でも、このようなドレスをいただいても、着る機会がありません」

「二月後に王宮で、王妃様の生誕祭が行われる。そなたも、それを着て来たまえ」

マリーダは眉をひそめた。

マリーダの疑問が分かったように、アルベルティは声を上げて笑った。

「安心しろ。私は、妻を差し置いて他の女を連れていくほど非常識な男ではない。私が推薦した記者として招かれるのだ。私は美人に弱くてな。お前の新聞社を鼻屑するぐらい、良いではないか」

マリーダが女優だった頃も、パトロンはいた。しかし、あまり恩恵にあやかっていると、後で面倒になることを知っている。

マリーダは深く頭を下げた。

「ドレスは勿論のこと、宮殿への招待ありがとうございます。良い記事が書けるよう力を尽くします」

情婦にさせられるわけではないと分かり安堵したのも束の間、マリーダは胸騒ぎがしていた。王妃の生誕祭の時に、何かが起こるのではないか。

(続く)